

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：33921

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22730527

研究課題名(和文) アタッチメント安定性に対する養育者要因の影響プロセス：主観・行動・適切性の検討

研究課題名(英文) Longitudinal Study on Maternal Subjectivity, Parenting Behavior and Child's Security of Attachment

研究代表者

森口 郁子(篠原郁子)(Shinohara, Ikuko)

愛知淑徳大学・心理学部・准教授

研究者番号：30512446

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、母親の主観から行動までを含む複数の特徴に着目し、それらの相互関連性ならびに子どものアタッチメント安定性の発達への影響を縦断的に検討することであった。母親が有する乳児の心的世界への主観は、後の子どものアタッチメント安定性の下位要素と長期的に関連していたが、母親が示す子どもへの養育行動の質にはそうした関連は認められなかった。アタッチメント安定性を育む養育者の要因について複数の視点から検討することの重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study analyzed a longitudinal relation between maternal subjectivity on infant's mental states, parenting behavior and child's security of attachment. Maternal subjectivity, but not the quality of parenting behavior, related to later child's score associated with secure attachment. These findings suggested that maternal thoughts about child's inner world contribute to child's security of attachment.

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：アタッチメント 発達心理学 親子関係 母子関係 乳児期 mind-mindedness 母子相互作用 縦断研究

1. 研究開始当初の背景

乳幼児が養育者との間に築くアタッチメントについて、Ainsworthら(1967)によるタイプ分類の研究以降、アタッチメントの質、すなわち、安定性が重視されている。乳幼児期に安定型のアタッチメントを持つ子どもは、同時期のみならず、その後に至るまで、良好な社会情緒的発達を示すことから、安定型アタッチメントの形成過程の研究が盛んに行われてきた。

特に、養育者が与える子どもへの影響について多くの研究が実施されてきたが、アタッチメント安定性の規定因として最も早期に提唱されたのが、養育者の sensitivity である(Ainsworth et al., 1978)。Sensitivity を高く持つ養育者の子どものアタッチメントは安定している、という親子間の影響は今日まで多くの注目を集めている。しかしながら、現在、sensitivity の影響力について見直しを求める声も上がっている。というのも、養育者の sensitivity と子どものアタッチメント安定性の関連を問う研究のメタ分析の結果から、両者の関係は中程度であり、予測されたものよりも弱いことが見出されたのである(De Wolff & van IJzendoorn, 1997)。こうした背景から、養育者の如何なる特徴が、子どものアタッチメント安定性に影響するのか、再び多くの検討が始まっている。

Sensitivity 再考の中で、この概念に多様な要素が内包されていること、すなわち、「子どもの信号を感知し、解釈し、適切に、タイミングよく反応する」という多義性に纏わる問題が議論されてきた(Claussen & Crittenden, 2000)。こうした議論を受け、Sensitivity を一つの起源としながらも、養育者の特徴をより明確に描写するものとして、複数の派生概念が提案されるに至っている。

例えば、Oppenheim & Koren-Karie (2001) は子どもの行動の動機を洞察しようとする養育者の傾向を Insightfulness (洞察性) と呼ぶ。Meins (1997) は、養育者が子どもを心を有した心的行為者であると見なすことを重視し、この傾向を mind-mindedness (MM) として概念化した。一方、Biringen (1991; 2001) は、子どもにとって養育者が情緒的に利用可能であるかを問う Emotional Availability (EA) の重要性を唱えている。これらの概念について、子どものアタッチメント安定性との関連性が実証されたことから (Oppenheim & Koren-Karie, 2001; Meins et al., 2001; Ziv et al., 1996)、現在、sensitivity に次いで提唱された新概念に注目が集まっている。

こうした派生概念についての研究知見は、子どものアタッチメント安定性の発達に及ぼす養育者側の要因による影響を知るうえで、重要な情報となっている。しかしながら一方で、各派生概念が重視し、また強調する特徴には、養育者が有する子どもの全般的表

象から具体的な養育行動まで幅広い差異がみられる。Sensitivity からの派生、また、アタッチメントの予測力といった共通点から並列的に取り上げられることが多いこれらの派生概念について、概念間の差異や関係に迫る論考や実証は、未だ進んでいない。また、アタッチメント安定性の規定因を探る研究では、単一の、ある意味では決定的な要因を探究しようとするデザインが多く、先述した複数の派生概念間にどのような関連があり、また、そういった養育者に関する複数の要因が、子どものアタッチメントにそれぞれどのように影響するのかは明らかにされていない。

2. 研究の目的

以上のような背景をふまえ、本研究は、子どものアタッチメント安定性に寄与すると目される養育者側の複数の要因に同時に注目し、それらの要因の相互の関連性、ならびに、子どもの発達への影響を長期縦断的に検討することを目的とする。

養育者側の要因として具体的には、これまでにアタッチメントとの関連が報告されている、先述の洞察性、MM、EA に注目する。この3つの概念は、いずれも sensitivity に由来するという共通点を持つが、以下のように特徴を整理することができる。まず、洞察性と MM は、養育者が「子どもの心的世界の存在をどのように考え、解釈しているか」という主観的特徴に焦点をあてている。一方、EA は親子相互作用場面における現実の養育行動に表れる特徴である。また、養育者の主観に関わる洞察性と、養育行動についての EA はともに、内容の適切性を重視する。一方、Meins (1997) の提唱する MM 概念を測定した篠原 (2006) では、養育者が幼い乳児にどれほど豊富に心的世界の状態を読み込むか、という主観的特徴の量的豊富さを指標としている。本研究では、養育者の特徴を(1)主観と行動、(2)内容の適切さと量的豊富さ、という視点で整理したうえで、それぞれが相互にどのような関連を持ちうるのかを分析することを第一の目的とする。そして、それら複数の養育者の特徴が、後の子どものアタッチメント安定性にどのような影響を及ぼすのかを縦断的に検討することを第二の目的とする。

3. 研究の方法

生後6カ月の乳児と母親を対象に1回目の調査を行い、母親の特徴を測定した。その後、これらの母子の追跡調査を実施し、生後20カ月時に2回目の母子観察を行った。さらに、生後30カ月時に子どものアタッチメント安定性を測定し、1回目、2回目の調査で得られた母親側の特徴との関連性を分析した。以下、各調査時期について、主な変数に関する手続きを示す。

(1) 1 回目の調査

研究協力者

生後 6 ヶ月児 33 名とその母親 32 名(乳児の平均月齢 = 7 ヶ月 6 日, レンジ 6 ヶ月 3 日 - 8 ヶ月 21 日, 女児 16 名, 男児 17 名, 双子 1 組を含む)。

手続き

大学のプレイルームにて以下の測定を行った。

A. 母親の MM の測定: 母親が乳児に対して持つ主観的特徴の測定を行った。これは、母親が乳児に対してどれほど豊富に心の存在を想定するかという、量的な豊富さを測定するものであった。実験は、篠原(2006)が開発した MM 測定実験に依拠した。PC モニター上に母親自身の子どもではない乳児のビデオ刺激を提示し、ビデオに登場する乳児が何らかの感情や思考、動機等を有していると思うかを質問した(計 5 施行)。口頭での自由回答を求め、乳児の言動に対して、心的状態の存在に言及した頻度をカウントし、得点とした。

B. 子どもの心的状態への洞察性の測定: 母親の主観的特徴の一つである、わが子の感情や動機といった心的状態の読みとりに注目し、その読みとりの内容としての適切さを洞察性として測定した。洞察性の測定は、Insightfulness Assessment Interview (Oppenheim & Koren-Karie, 2002)により実施した。事前に録画した実際の母子遊び場面の映像を母親に提示し、子どもの行動の背景にある動機について問う半構造化面接を行った。子どもについての語り方を、マニュアルに基づき 3 タイプに分類して母親の特徴を得た。3 つのタイプとは、Positive Insightfulness / Disengaged / one-sided を指し、Positive Insightfulness が最もバランスのとれた適切な洞察性に該当する。

(2) 2 回目の調査

研究協力者

第 1 回目の調査に協力した母子を追跡した。生後 1 歳半時点の調査には、母子 16 組(子どもの平均月齢 = 20 ヶ月 13 日, レンジ 18 ヶ月 7 日 - 21 ヶ月 24 日, 女児 10 名, 男児 6 名)が参加した。なお、これ以外の母子についても、追跡調査を継続している。

手続き

母子を再度大学のプレイルームに招き、以下の観察を行った。

A: 母親が示す子どもへの養育行動の質の測定: 母子自由遊び場面を 15 分間観察した。母親の行動の質を Emotional Availability Scale (Biringen, Robinson, & Emde, 1998)により評定した。この EA (情緒的利用可能性)の下位項目には子どもの情緒への「敏感性」、やりとりの適切な「構造化」、子どもを圧倒したり活動を強制したりしない「非侵入性」、

敵意や冷たさを向けない「非敵意性」がある。マニュアルに基づき、下位項目ごとに評定を行った。

(3) 3 回目の調査

研究協力者

第 1 回目の調査に協力した母子を追跡し、生後 2 歳半時点で調査を行った。現在までに母子 14 組(子どもの平均月齢 = 32 ヶ月 13 日, レンジ 30 ヶ月 4 日 - 34 ヶ月 16 日, 女児 8 名, 男児 6 名)が参加した。これ以外の母子についても、追跡調査を継続している。

手続き

母子を大学のプレイルームに招き、子どものアタッチメント安定性を測定した。実験者が母親に Attachment Q-Sort (Waters, 1995)の手順を説明し、子どもの行動が書かれている 90 枚のカードについて、自分の子どもの特徴に基づきカードを分類するよう教示した。母親が行ったカードの分類結果に基づき、各子どものアタッチメント安定性得点を算出した。さらに、Pederson & Moran (1995)に基づきアタッチメントの安定性に関連する複数の行動特徴について下位得点を算出した。

4. 研究成果

本研究では、主な変数として生後 6 ヶ月時に母親の洞察性と MM を、生後 1 歳半時に母親の EA を測定し、それらの相互の関連を分析した。続いて、母親の変数と生後 30 ヶ月時における子どものアタッチメント安定性との長期的関連について分析した。母親の洞察性については、インタビューの逐語録に基づくコーディングの作業途中であるため、以下では、母親の MM と EA、子どものアタッチメント安定性の測定結果に基づき主な結果を報告する。

(1) 母親の特徴間の関連性

生後 6 ヶ月時に測定された母親の MM

母親が 5 つの乳児ビデオ刺激の心的状態に言及したのは平均 9.69 回 (SD=3.22), レンジは 5 回-19 回であった。これを MM 回数得点とした。なお、母親の MM 測定実験中における全回答数(心的状態への言及以外も含む)の平均は 22.22 回 (SD=13.60), レンジは 8 回-85 回であった。発話の全体量を考慮し、MM 得点を全発話数で除したものを MM 割合得点として算出した。MM 割合得点の平均は 0.49 (SD=.16), レンジは 0.21-0.76 であった。なお、MM に関するこれらの変数のいずれにも、母親が現在育てている乳児の性別による有意な差は認められなかった。

生後 1 歳半時に測定された母親の EA

母子相互作用の観察に基づき評定された母親の EA の下位項目ごとの記述統計量を表 1 に示す。

表1 生後1歳半時の母親のEAに関する記述統計量

下位項目	平均値	(SD)	レンジ	評点の配分
敏感性	6.19	2.20	3-9	1-9点
構造化	3.68	1.20	1-5	1-5点
非侵入性	3.69	0.95	2-5	1-5点
敵意の無さ	4.63	.72	3-5	1-5点

なお、EAの各下位得点のいずれについても、子どもの性別による有意な差は認められなかった。

母親のMMとEAの関連

生後6ヵ月時に測定された、母親が乳児の心的世界に対して抱いている主観の特徴が、後の子どもへの具体的な養育行動といかなる関連を持つのかを検討するため、MMとEAの関連を分析した。

MM得点ならびにMM割合得点と、EAの下位項目4つとの相関分析の結果、有意な関連は認められなかった。

次に、男女別の分析を実施したところ、男児のみにおいて、MM割合得点と非侵入性の間に正の相関傾向が見られた($r_s=.765, p=.076$)。

(2) 母親の特徴と子どものアタッチメント

上記の分析から、MMとEAに母親間での関連は認められなかったが、次に、それぞれの母親の特徴が、後の子どものアタッチメント安定性とどのような関係を持つのかを分析した。

生後2歳半時の子どものアタッチメント

母親によるAQSの結果を分析し、2歳半時の子どものアタッチメントに関わる指標を得た。安定性得点の他に、表2に示した下位項目についても得点化を行った。表2に各記述統計量を併せて示す。

表2 生後2歳半時の子どものアタッチメントに関わる各得点の記述統計量

項目	平均値	(SD)	レンジ
安定性得点	.43	.429	.12-.77
[下位項目]			
むずかりやすさ	49.50	11.27	44-34
情緒の共有	18.50	3.23	13-24
安全基地行動	80.43	11.43	42-54
身体接触を楽しむ程度	35.07	4.29	28-43
従順さ	36.71	7.14	28-49

なお、標準化された安定性得点は.30以上において安定したアタッチメント関係を持

つことを示唆すると考えられている。今回の分析対象となった子ども14名のうち、安定性得点が.30以下であったのは2名のみであった。今回報告する分析を行った研究協力者については全体的に、安定したアタッチメント関係を持っていた子どもが多いという特徴があったと考えられる。

母親のMMについて

MM得点ならびにMM割合得点と、子どものアタッチメント安定性得点との関連を分析した。しかし、これらの変数について母子間には有意な相関は認められなかった(順に $r_s=.142, p=.629, r_s=-.051, p=.863$)。次に、AQSで測定される子どもの安定したアタッチメント行動に関わる下位項目についての分析から、乳児期に測定された母親のMM得点の高さが、子どもの「安全基地行動」の得点の高さと有意な正の相関傾向を持っていることが示された($r_s=.521, p=.056$)。

母親のEAについて

EAの各下位得点と子どものアタッチメント安定性得点の間に、有意な関連は認められなかった。次に、アタッチメントの下位得点との関連を分析した結果、母親の「敏感性」は子どもの「むずかりやすさ」得点と正の相関にあった($r_s=.596, p=.041$)。さらに、母親の「敏感性」と「構造化」は、子どもの「安全基地行動」得点と負の相関関係にあった(順に $r_s=-.636, p=.026, r_s=-.589, p=.044$)。こうした結果は、母親のEAの高さは全般的に子どものアタッチメント安定性を促すだろうという理論的説明とは異なる、複雑な関連を示唆するものであった。

(3) 考察と課題

以上、現在までに3時点での追跡調査を終えた母子に関する主な変数の分析結果を示した。現在までに行った分析より、まず、MMとEAの関連について、男児に関しては一部に関連するという有意傾向が示されたものの、全般的には有意な関係が見出されなかった。

この結果について、一つには、母親が乳児に対して抱く主観と、実際に子どもに対して実践する行動は必ずしも関連しておらず、それぞれの特徴として捉えることの必要性を示唆するものだと考えられる。また、MMが乳児に対する心的帰属の豊富さの指標であるのに対し、EAが行動の量ではなく、適切性を測るものであるため、母親が持つ子どもへの解釈の量的豊富さと内容の適切性は異なるものであると考えられた。ただし、生後6ヵ月時と20ヵ月時という測定時期の違いから、長期的な関係がみられなかったとも考えられる。今後、同時期におけるMMとEAの関連についても分析を進め、こうした「主観と行動」「豊富さと適切性」の重複と差異に関する検討を続けたい。

なお、先述のように、MM も EA も、ともに子どものアタッチメント安定性の予測因として報告されており、また、sensitivity への由来という点でも概念として共通点がある。しかしながら、今回の分析からは両者は母親個人内で関連していないことが示唆された。今後、母親個人内の関連性については、追跡調査を重ねてより大きなサンプルに基づく分析を実施することが課題であるが、MM と EA といった概念を安易に同一視することなく、それぞれの特徴の独自性についても理解をする必要が示されたと考えられる。

次に、子どものアタッチメントについての分析からは、母親が幼い乳児に豊かに心の存在を想定する傾向の高さ(MM 得点)が、後の子どものアタッチメント安定性に関わる安全基地行動に影響する可能性が示唆された。安全基地行動は、安定したアタッチメントを持つ子どもに多くみられると考えられる行動特徴である。分析からは、MM が直接に子どものアタッチメント安定性得点と関連する様相は認められなかったが、乳児期に高い MM 得点を持っていた母親の子どもは、安全基地行動をより多く示していることが示唆された。

一方、母親の EA については、子どものアタッチメント安定性そのものとは関連が認められず、「むずかりやすさ」等との複雑な関係が見いだされた。EA の高さは子どもの安定したアタッチメントを予測するという先行研究(Ziv et al., 1996)とは異なる結果が得られたことについて、現在も継続中の追跡調査においてより多くの対象者のデータを得た上で同様の分析を行っていくことが課題である。なお、筆者は現在、Emotional Availability Scale の最新版の評定方法について考案者の Dr. Biringer によるトレーニングを受講している。今後、最新版を用いた母親の EA の評定と、MM ならびに子どものアタッチメント安定性との関連について引き続き分析を進めていきたい。

以上、本報告では、現在までに追跡を終えた親子のデータに基づき、部分的ではあるが得られた結果を示した。分析結果において注目されたのは、母親の MM と EA はそれぞれ異なる特徴を測定したものであり、単純に母親個人の中で重複するものでないことが示唆された点である。子どものアタッチメントの発達との関連パターンについて見いだされた差異もまた、この可能性を支持していると思われた。本研究の知見は、概念レベルでは共通性が高いと考えられる母親の特徴について、実際に測定された指標レベルでは、それぞれが子どもの発達に対して独自の説明力、予測力をもつ変数である可能性を考慮することの重要性を示唆するものだろう。親子支援やアセスメントの場では、母親の特徴として、行動あるいは主観的な語りや回答のいずれか、といった限られた情報しか入手できないことも多いと考えられる。そういった場

で得られる、限られた情報から子どもへの影響を予測し、必要な支援の内容を検討していくために、有益な判断材料となるような知見を得ていくことが必要である。今後、追跡が可能な協力者については調査を重ね、こうした課題に対する検討を続けたいと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. 篠原郁子 (2014) 母子相互作用についての発達心理学的アプローチ: 母親による子どもの心の想像と子どもの社会的発達, ベビーサイエンス(日本赤ちゃん学会編), vol13, pp44-53, (査読無), http://www.crn.or.jp/LABO/BABY/LEARNED/13/SHINOHARA_GAKKAI SHI .pdf

〔学会発表〕(計 14 件)

1. 篠原郁子: 縦断研究における親の発達; 変わるものと変わらないこと, 日本心理学会第 77 回大会, シンポジウム, 2013 年 9 月 21 日, 札幌コンベンションセンター, 北海道札幌市.
2. 篠原郁子: 母親の目に映る赤ちゃん; 母親の主観性と子どもの社会的発達, 第 13 回赤ちゃん学会, ラウンドテーブル, 2013 年 5 月 25 日, アクロス福岡, 福岡県福岡市.
3. 篠原郁子: 「赤ちゃん」に対する養育行動の背景に迫る 認知心理学・神経科学・構成論の視点から, 第 23 回日本発達心理学会, シンポジウム, 2012 年 3 月 9 日, 名古屋国際会議場, 愛知県名古屋市.
4. 篠原郁子: 何が互いを惹きつけ合うのか? -養育者-乳児間インタラクション再考-, 日本心理学会第 75 回大会, ラウンドテーブル, 2011 年 9 月 17 日, 日本大学, 東京都.
5. 篠原郁子: 乳児の心に対する焦点化傾向と母子相互作用, 日本心理学会第 74 回大会, ポスター発表, 2010 年 9 月 20 日, 大阪大学, 大阪府吹田市.
6. 篠原郁子: アタッチメントの視座から親子関係における主観性に迫る 実証研究と臨床実践の架橋を図って, 日本心理学会第 74 回大会, シンポジウム, 2010 年 9 月 22 日, 大阪大学, 大阪府吹田市.

〔図書〕(計 2 件)

1. 篠原郁子 (2013). 「発達心理学事典」(7. そだてる 乳幼児と親子関係) 日本発達心理学会(編), 丸善出版, 160-161.
2. 篠原郁子 (2012). 「発達科学ハンドブック 5 社会・文化に生きる人間」(第 3 章 発達早期), 日本発達心理学会(編),

新曜社，48-57 .

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

〔その他〕

なし

6 . 研究組織

(1)研究代表者

篠原 郁子 (Shinohara Ikuko)

愛知淑徳大学 心理学部 准教授

研究者番号：30512446